

日本語教員養成課程について

—志望学生数に対する担当教員の不足—

氏家 洋子

日本語教員養成コースが全学部の2年生に向けて副専攻として開設され、4年目を迎えた。形ができあがってしまうと、それを決め手として本学を選んだという学生にも出会うようになる。昨年赴任し、お膳立てのできあがった中で本コースを担当することになった者として、把握できた現状の一端をここにまとめ、問題点を整理してみる。コースの主体である学生、また、周辺に位置する関係者がより充実したコースを作り上げていくための資料提供となればと希う。

表1は本コースを希望しても全員を受容れることのできない現状を示している。その理由としては専らコースの担当を任とする専任教員が最低複数名必要（これは当初の予定でもあったと聞く）とされるのに不足していること。また、4年生での教育実習の受容れ先の問題がある。（今年は5月に、実際に授業を担当させてくれる横浜市内の飛鳥学院に全18名がお願いできた。）次に、許可者と修了者の数には異同がある。3年生の前半まで続くか否かが分かれ目であり、89年度許可者の修了者数はそこから推定した。しかし、同一科目に複数の授業が用意されていれば修了できた（る）

表1 本課程の学科別志願・許可・修了者数

学部・学科	年度 学生数	1987		1988		1989			1990	
		許可	89年度 修了	許可	90年度 修了(予定)	志願	許可	91年度 修了(推定)	志願	許可
工 工業経営		0	0	1	(1)	1	1	(1)	0	0
法 法 律		2	1	2	(1)	1	1	(2)*	0	0
経 経 済		3	2	1	(0)	0	0	0	8	5
外 貿 易		4	2	3	帰国 (2+2) 留学 (2)	4	4	(3)	4	1
英 英 語		19	11	13	帰国 (9-1) 留学 (1)	18	14	帰国 (12+1) 留学 (2)	22	12
西 西 語		15	7	10	(3) (留学)	4	2	帰国 (2+1)	13	10
中 中 国 語						13	9	(9)	8	2
計		43	21	30	(16+1)	41	31	(29+2)	55	30

1990年6月現在

1987年度と1988年度は許可のしかたが1989年度以降と異なるので、志願者数は省略する。

*90年度卒業予定で時間割の都合で91年度の聴講により修了する予定。

というケースもある。

表2は本コースの担当者に関し、特にこの4年間で異なりがあった場合を挙げる。ここには事情が許せば（許す条件が整えられれば）担当可能な教員の少なくとも一端が現れていると言える。並んだ科目名からも多岐にわたることが歴然とした、この純粋言語学と応用言語学にまたがる分野に専任で当たる担当者が最低複数名必要なことは当初の採用予定者数決定の段階で了解されていたことと思う。その実現への準備に時間が必要なら、その間、次のような手だても考えられる。それは非常勤教員の持ちゴマを1から2にしたり、また、経験と情熱のある担当経験者に当人の採用時の担当科目が何であるかを超えて、コースの科目担当にまわって貰える条件を整えることである。

以上は一例であるが、本コースをどこまで充実していけるか、あるいは、本学の人材を活かすことにどこまで努力をなし得るかは日本そして日本語の国際化を本学の成員がいかにか受止め、それにかかわろうとしているかのバロメーターになると考える。

表2 本課程専門必修科目の担当者の異同

科目名	年度 単 位	担 当 者 名			
		1987	1988	1989	1990
日本語学Ⅰ(概論)	4	高野	高野	高野	氏家
Ⅱ(音声)	2	高野	高野	金田(非)	金田(非)
Ⅲ(文字・表記)	2	—	高野	金田(非)	金田(非)
Ⅳ(文法・文体)	2	—	—	氏家	氏家
日本語史	2	—	—	氏家	高野
日本事情概論	2	ボチャリ	ボチャリ	氏家	上条
日本語教育法	4	—	保崎	氏家	氏家
日教教材教具論	2	—	水野	氏家	氏家
日教評価法	2	—	—	氏家	氏家
日本語教育実習	2	—	—	上条・小池 氏家	氏家

(非)は非常勤教員

ほかに、異同のない対照言語学（英語—深沢、西語—木村、中国語—那須の各先生）がある。